書 評

神経神学―科学は霊性にいかに光を当てるか―

アンドリュー・ニューバーグ
著
貝谷久宣　訳
北大路書房
2023 年 4 月　400 頁
本体価格　5,800 円＋税

著者のニューバーグ A. は放射線医学を専門として，霊的・宗教的現象の神経学的研究に従事している研究者である．彼は，神経神学（neurotheology）を，身体性と霊性や宗教，すなわち脳と霊的現象との関係を組み合わせて，人間の本質を総合的によりよくとらえようとする学問である，と定義している．さらに，科学と宗教は対立するものではなく互恵的なものであるという前提に立ち，人間の科学性と宗教性を多様な研究領域と結びつけることで，人の本性に潜む宗教性・霊性の洞察へ導くことができると主張する．

宗教的現象への科学的接近は，著者が専門とする脳画像研究，認知神経科学，神経学，精神医学，心理学，人類学，医学，遺伝学，意識の研究などで展開されている．著者の博識は，本書において，これらの領域で行われている研究や論考を自由に渉猟するのである．一方，「宗教とは何か」という問いはきわめて難解である．よって立つ思想や学問により定義はまちまちで，本書でも 1 章を割いて緒論が紹介されるほどである．

著者を含む神経科学者たちは脳画像研究の技術を導入して，霊的・宗教的な経験と相関する脳回路を特定しようとしてきた．最新の研究によれば，大脳皮質に加えて進化的に古い脳領域が重要な役割を果たしていることがわかってきた．人間が初めて宗教的になった時期は明確ではないが，宗教的行為の信頼できる証拠は中期旧石器時代（30～3 万年前）から見つかるといわれる．この時期のヒト族（ホモ族）の遺跡からは死者を弔う埋葬の儀式が行われていたことが発見されているからである．また，古代エジプトとメソポタミアで宗教は成文化され，この時から宗教史が始まる．宗教は形こそ違え広く世界中に存在し，文化的に普遍であり，今も多くの人々が宗教に携わっている．

ちなみに進化心理学では，宗教は心理学的な適応の一形態であると考える．道徳的で向社会的行動を促進し，サイズが大きくなった集団内の協力行動を強化し，その集団の生存に有利に働いたという説を唱える．その一方で，宗教が異なる集団間の闘争が猖獗を極めることも周知の事実である．

宗教を科学の俎上に載せる試みは，その科学性を強調するならば，近代自然主義，還元主義に陥り，神経神学は，神や霊性を生物学的現象，すなわち脳を通してしか感じることができない現象として，それらを脳の中に閉じ込めようとしている唯物論のようにも思われる．しかも研究対象としてマインドフルネスを含む瞑想，祈り，儀式，人工的な神秘体験などの「宗教的な活動」に限定せざるを得ないことには注意が必要である．

しかるにニューバーグは，ダギリ Y. らとの共著『脳はいかにして〈神〉を見るか』（茂木健一郎監訳，PHP 研究所，2003 年）を，「ヒトの脳がいまある構造を持ち続け，心がこの深遠なリアリティを探知し続ける限り，（中略）神がわれわれの傍らを離れることも無いのである」と締めくくっており，ここにインマヌエル（神，我とともに）になぞらえた著者の信条が表れているように思えてならない．

本書『神経神学』は，神の脳科学を中心テーマに置き，脳の物理的状態が宗教的意識にかかわることを認めながらも，神の存在あるいは非存在の証明に挑もうとしているわけではない．冒頭に述べた目的をもつ神経神学という学際的な学問体系を築こうとする試みであり，いまだ揺籃期にあるが，その基盤は本書においてほぼ完成されていると言ってよいだろう．

最後に，本書を訳出し，神経神学を日本に紹介された貝谷久宣氏の多大なご努力に敬意を表したい．

（神庭重信）

doi：10.57369/pnj.24-102